

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26220502	研究期間	平成26(2014)年度 ～平成30(2018)年度
研究課題名	グローバル社会変動下のリスクと くらし：先端ミクロ計量経済学を 用いた実証・政策研究	研究代表者 (所属・職) <small>(平成31年3月現在)</small>	澤田 康幸（東京大学・大学院経 済学研究科・教授）

【平成29(2017)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A- 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究では、11名の研究者で3年間に20編の査読付き論文が国際学術雑誌に掲載されるなど、順調に研究成果が出されている。本研究の3本柱である、①高齢化リスク、②災害リスク、③貧困リスクについて、それぞれ当初の計画に沿って研究が順調に進展しているが、JSTAR（くらしと健康の調査）を使った高齢化リスク研究を更に進展させ、エビデンスに基づく有益な政策を提言することが期待される。今後、3本の研究をそれぞれ進展させていくと同時に、それぞれがばらばらな研究にならないよう、研究代表者のリーダーシップの下、互いに連携し、3つの研究を統合する理論的フレームワークを構築するなど、研究課題全体としての成果を出すことが望まれる。

【令和元(2019)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	<p>グローバル社会における3つのリスク（1. 高齢化リスク、2. 災害リスク、3. 貧困リスク）とそのメカニズムについて、独自のパネル調査やフィールド実験など多様なデータを精緻な手法を用いて研究した本研究の意義は大きい。研究組織や研究費の利用にも工夫がみられた。本研究で得られた知見は明確であり、政策への応用も期待できる。研究成果の多くは英語で書かれ、インパクトファクターの高い雑誌へ多数掲載され、レベルの高い政策フォーラムで紹介された点も高く評価できる。</p> <p>一方で、本研究の3本柱である相互の関連を示す理論構築及び国民へのわかりやすい研究成果の発信にはやや課題が残ると判断した。</p>